



👁️👁️ みどころ

『レッド・ファミリー』（13年）に続いてキム・ギドク監督が南北朝鮮問題に鋭く切り込んだ本作の主人公は、北の寒村で貧しくも平穏な生活を送る漁師。魚網がエンジンに絡んだ事故で南へ流れ着いた男にスパイ容疑がかけられたのは当然だが、そこからは取調べ官と警護官の2つの対立軸による興味深い展開に・・・。

過激な暴力シーンとセックスシーンを抑制した本作は実にわかりやすい。そのうえ低予算かつ早撮りで作られたことは明らかだ。すると、本作はキム・ギドク監督の手抜き作？いやいや決してそうではない！

1つの論点を2つの対立軸から描く本作はわかりやすいが、実に鋭く南北朝鮮問題の問題点を提示している。『君の名は。』（16年）の大ヒットは結構だが、邦画も若者向けの駄作を連発せず、本作のような問題提起作を作って欲しいものだが・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□ 『レッド・ファミリー』 に続いて南北問題に切り込みを■□

キム・ギドクの監督・脚本・製作映画は毎年増え続けているが、南北朝鮮問題をテーマにした映画は私が見逃している『ブンサンケ』（11年）と、『レッド・ファミリー』（13年）の2本だけ。2014年9月3日に観た『レッド・ファミリー』ではユーモアたっぷりの目で家族を描きながら鋭く南北問題を提起していた（『シネマルーム33』227頁参照）が、さて本作では・・・？

南北朝鮮問題を描く映画では、『シュリ』（99年）、『JSA』（00年）（『シネマルーム

1』62頁参照)、『二重スパイ』(03年)、『シネマルーム3』74頁参照)に代表されるように、北朝鮮の「特殊工作員」を主人公にした映画が最も強烈で、『レッド・ファミリー』でも実は一見幸せそうなファミリーの要に座る妻が北の特殊工作員だったというヒネった設定が面白かった。ところが、本作の主人公は北朝鮮の寒村で妻(イ・ウヌ)と幼い一人娘と共に貧しくも平穏な日々を送る漁師ナム・チョル(リュ・スンボム)。彼の唯一の財産であるモーターボート(といってもモーターがついているだけのオンボロ船)で毎日漁に出て、その日の糧を得ているだけで政治に何の関心もないチョルには、南北問題など本来何の縁もなかったはずだが・・・。

■□■いつも絶妙のタイトルを! ■□■

本作の原題は『그놈』、英題は『THE NET』だが、邦題はさらに「網に囚われた男」という(丁寧な)副題をつけている。もちろん『THE NET』だけではサッカーをテーマにした映画と誤解される恐れもあるから、「網に囚われた男」というサブタイトルも絶妙だが、本作を味わうには本来はサブタイトルなしで十分。

朝早く妻に起こされ、食事もそこそこに朝イチのセックスを済ませ、一人モーターボートに乗って漁に出たのはチョルの日常風景(?)だが、今日は間の悪いことに魚網がエンジンに絡まってエンジンが故障し、ボートが立ち往生し韓国側に流されていったから大変。境界線を越えれば南への亡命と誤解されて警備兵から射殺されるかもしれない事態の中、チョルのオンボロ船の行方は?本作導入部のそんな姿を見れば「The NET」の意味は充分わかるから、そこに「網に囚われた男」というサブタイトルをつけるのは「屋上屋を重ねる」感がある。もともとそんな導入部を見なくても、サブタイトルを見れば本作がサッカー映画ではないことがわかる意味では、オーケー?

それにしてもキム・ギドク監督は『レッド・ファミリー』といい本作といい、南北朝鮮をテーマにした映画で、何とも絶妙なタイトルをつけるものだと感心!

■□■取調べと警護。2つの視点の対立は? ■□■

キム・ギドク監督の映画が面白くかつわかりやすいのは、常に1つのテーマについて2つの対立軸を明確に示してくれるため。本作はその点がとりわけ顕著だが、本作ではスパイ容疑で逮捕されたチョルに対する取調べ官(キム・ヨンミン)による取調べと、監視役についた若き警護官オ・ジヌ(イ・ウォンゲン)の警護という2つの対立軸が興味深い。

チョルに対する取調べ官の取調べが陰湿かつ執拗なのは、取調べ官がいろいろと北朝鮮に対して過去のしがらみを持っているためであることが少しずつ明かされていくが、そんな取調べ官の個人のキャラによって、でっち上げをしてでもスパイにまつりあげられようとしているチョルはたまたまのものではない。他方、ジヌは北朝鮮に何のしがらみも持っていない若い世代だから、家族に会うことだけを切望しているチョルに何の偏見もなく接し

ている。北と南と立場は異なっても所詮は同じ人間同士だから、チョルにとって取調べ官はヤバイ男だが、ジヌはいい男だということが少しずつわかってきたのは当然だ。

このように、本作中盤はスパイ容疑をかけられたチョルに対する「取調べ」と「警護」という2つの視点からストーリーが展開していくが、チョルがある時、偶然同じスパイ容疑で逮捕された男から、ソウルに住んでいる娘への伝言を託されたことから、少し事態が緊迫感を増してくることに……。

■□■スパイでも亡命でもない「第3の道」は……?■□■

チョルは北の寒村で細々と魚を獲ることで生計をたてている漁師という設定だが、「いい身体をしているな」とネチネチと迫ってくる取調べの中で、チョルも軍隊経験(?)があり、武器無しの相手なら1人で5人を倒せる格闘技の持ち主であることが明らかにされていく。これは本作後半で見せるチョルの取調べ官に対する「反撃」の下敷きになる設定だが、同時にこれはチョルがくり返し見せる北朝鮮への愛国心の持ち主であることを根拠づけるためのもの?私にはこの設定は無用なサービス(?)だったような気がするが、さてあなたは……?

スパイ容疑を頑として認めないチョルに対して、亡命すれば住居やカネが与えられるし韓国の女性と結婚することもできると勧誘もされたが、チョルはそんな亡命も断固拒否。チョルにとっては、いかに独裁国家であってもまたいかに貧しくとも、妻子の待つ北朝鮮が自分の祖国というわけだ。そんなチョルに対して、冷静沈着な室長(チェ・グィファ)が下した「第3の道」は、チョルをソウルの街で「泳がせる」こと。つまり、物質文明で繁栄しているソウルの街をチョルが直接見聞すれば、チョルの心の中から「亡命したい」という欲求が芽生えてくるはずだという読みだが、さて……。

「泳がせ作戦」は半分騙しのような形で展開されるが、それに対してチョルは目を閉じてすべてを見ないことにする形と抵抗。しかし、そんな抵抗はいつまで続くの?ソウルの繁華街で1人放り出されたチョルは何度も大声で「ジヌ同志!」と助けを求めたが、更なる作戦の中でついには目を開けざるをえなくなると……。

■□■やっと北への送還が実現したが……■□■

ソウルの街に一人放り出されたチョルが仕方なく目を開けて周りを見渡すと、そこは北朝鮮とは全く異質の文明社会。自分の一人娘が持っている縫いぐるみは繕われた粗末なものだが、ショーウィンドーに飾られた縫いぐるみの豪華さはどうだ。もっとも、夜の街を一人徘徊する中で偶然出会ったほとんど下着だけの姿の女は、自由で豊かな国であるはずの南朝鮮でも身体を売って家族を養っているそうだからアレ……。さらに、たまたまジヌとはぐれてしまった機会に(?)あのスパイ容疑の男から頼まれた、まるで詩のような伝言を、有名な腸詰めのお店まで行き娘に伝えると、突然その娘は店から出ていってしま

ったからこれまたアレレ……。一人ソウルの街でそんな体験をした後、自分を信用してずっと待っているかもしれないジヌの元へ帰ってみると、案の定……。

ところが、腸詰めの店でのやりとりをチョルを尾行していた取調べ官から目撃されていたため、警察に戻るとチョルは取調べ官から再度スパイ容疑をかけられ、取調室のカーテンが降ろされる中、より強い手段（拷問）での取調べを受けることに。もちろん、拷問だけでは屈することはなかったが、自白の書類に指印さえすればすぐに北の家族に会えるという取調べ官の甘言（騙し）にまんまとひっかかったから、もはやチョルは万事休す……。

そんな展開の中、絶望したチョルは自ら舌を噛み切って死んでしまったあのスパイ容疑の男と同じように舌を噛み切っての自殺を試みたが、チョルからの別れの言葉に不吉感を覚えたジヌが取調べ室に飛び込んだことによって、辛くも一命をとりとめることに。本作中盤はそんなテンコ盛りのストーリーが、キム・ギドク作品では珍しくわかりやすい展開をしていく。そして、チョルがソウルの街を一人で歩く映像が北に流れたことによってチョルの取り扱いが大きな政治問題になると、さすがにチョルをスパイと決めつけることができなくなった韓国政府はチョルを北に送還することを決定。これにて、やっとチョルの北への送還が実現したが……。

■□■すぐに家族と再会？いやいや北での処遇は？■□■

仲代達矢が主演した小林正樹監督の『人間の條件』全6部作（59～61年）でも、第5部・第6部では梶上等兵にソ連側からスパイ容疑がかけられ迫害される姿が登場した。一介の兵隊ですらそうなのだから、いったん南へ渡り北のテレビで放映されるほど有名になった上でやっと北に送還されたチョルが、スナリ妻子の下に帰されるはずはない。チョルを待っていたのは国家安全保衛部による、韓国警察での取調べと同等もしくはそれ以上に厳しい取調べだった。すべての行動をもらさず書け！南でチョルは取調べ官から何度もそう命じられたが、やっと送還された北でもチョルは連日そのように責められることに……。

南では、北に送還されるチョルに対して善意の国民からたくさんのプレゼントが届けられたが、もちろんチョルはそれを持って凱旋帰国できる立場ではない。送還の様子が映像に映されることをよく知っているチョルは、モーターボートに乗り込むについても南からもらった服をすべて脱ぎ捨てパンツ1枚で北に向かったが、所持品はホントにパンツ1枚だけ？そこらあたりにチョルの甘さを見せるのがキム・ギドク流の面白さだから、そこではチョルがジヌからももらった小さなビニール袋に隠された米ドル紙幣に注目！チョルの取調べ風景では、南の施設の近代性と北の施設の貧弱性の対比が顕著だが、それ以上に顕著なのが南の便所のキレイさと北の便所の汚さ。取調べ官から勧められるままに鶏肉をほおぼったチョルが便意を催しトイレにかけこんだのは明らかに取調べ官の計算ずくだが、便器の中まで調べられた結果、あのビニール袋に包まれた米ドル紙幣が発見されたから、チ

ヨルはここでも、もはや万事休す・・・。

そう思われたが、「地獄の沙汰も金次第」とはよく言ったもので、その米ドル紙幣を裏処理しようと考えた取調べ官のおかげで、チョルは国家安全保衛部から解放され、やっと妻と幼い子供が待つ自宅へ帰れることに。ところがここに至って、南でも北でもトコトン痛めつけられたチョルの精神は・・・？

■□■男の精神のあり方はセックス面に顕著に！■□■

初期のキム・ギドク監督作品は衝撃的なストーリーラインと過激な暴力性、過激なセックスシーンが目立っていたが、本作ではそれを極力封印している。そのことは、取調室での暴行（拷問）シーンをあえてカーテンを下ろすことによって省略していることに端的に表れている。もう1つのキム・ギドク作品の特徴は、吉野家の「早い、安い、うまい」と同じで、低予算と短期間撮影だが、本作を観ても、なるほどこれなら低予算で短期間撮影が可能だということがよくわかる。

それはともかく、『人間の条件』における梶上等兵は最後まで気力を失うことなく妻・美千子の待つ日本に向けて雪の中を一人歩み続けたが、さてチョルの精神は？男の精神面のあり方はセックス面に顕著に表れるそうだが、それは66歳で直腸ガンの手術を、67歳で胃ガンの手術をした私にも少しうなずける面がある。やっと妻子の待つ自宅へたどり着いたチョルの表情からは生気が消え失せ、妻子を抱きしめようともしなかったのは一体なぜ？また、本作冒頭では朝食もそこそこに妻の肉体にむしゃぶりついていたチョルが、今は妻からの下半身への必死のご奉仕に全く応えられなくなっているのは一体なぜ？こんな対比を見せつけられると、過激な暴力シーンとセックスシーンを抑制した本作でキム・ギドク監督が見せる演出力に舌をまかざるをえない。

■□■あなたは、この結末をどう解釈？■□■

本作ラストは、漁に出て魚を獲るしか生きていく術のないチョルが、国境警備隊から「漁は禁じられている」「漁に出れば射殺する」と警告される中、「漁をしなければ生きていけない」「撃つなら撃て」と完全に開き直り、漁に出かけていくチョルの姿を映し出していく。

ここまで開き直られると現場の警備兵の判断だけですぐに射殺することはできず、上層部の指示を仰いだのは当然だが、さてそれに対する命令は？そしてその実行は？細かいストーリーを交錯させた本作中盤に比べると、このラストの展開はいかにもあっけないが、さあそこであなたが感じるものは・・・？

本作では、小さなビニール袋に包まれた米ドル紙幣とともに南から娘へのおみやげとして持ち帰った縫いぐるみが小道具として重要だが、娘はそれを喜び有効活用しているの？ひょっとして、娘にとっては父親が命懸けで持ち帰った豪華なぜんまい仕掛けの縫いぐるみよりも、母親に繕ってもらったオンボロの縫いぐるみの方が大切に愛着があるので

は・・・？

本作はチョルのモーターボートのエンジンが魚網に絡まったことがすべての問題の出発点だが、「The NET」に絡まったのはホントにエンジンだけ？本作を観ていると、チョルそのものがさまざまな「The NET」に絡まり、もがいてももがいてもそこから逃れられない感が強い。しかして、本作のタイトル「The NET」とはホントは何を指しているの？そんなことを考えながら、本作の意外にあっけない結末と余韻を残す結末の両者をじっくり味わいたい。

2016（平成28）年12月26日記